

お辞儀の特徴分析 —状況による変化に着目して—

上野 楓[†] 正田 悠^{††} 坂本 晶子^{†††} 阪田 真己子[†]

[†]同志社大学文化情報学部 ^{††}立命館大学スポーツ健康科学部 ^{†††}(株)ワコール人間科学研究所

1. はじめに

自身が抱くイメージを操作して相手に伝えることを「自己呈示(self-presentation)」という。従前の研究では、強い印象操作の意図が働いていることを前提としており、状況によって自己呈示の意図がどのように異なり、それがどのように行動に反映されるかについては言及されてこなかった。そこで、本研究では人の日常的な何気ない動作として「お辞儀」に着目し、それが他者への印象操作の手段としてどのように機能しているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

大学生・大学院生 70 名(男性 33 名、女性 37 名、平均年齢 21.17 歳、SD = 2.19)に対し、印象操作の意図を変化させるため自己紹介スピーチを練習と本番の 2 条件に分け実施した。一人につき計 4 試行のお辞儀を分析対象とし、OpenPose(Cao Z. et al, 2018)にて取得した二次元座標データから、白井他(2014)を参考に動作特徴量を算出した(図 1 参照)。また、自己呈示の程度(自動的な印象操作尺度)、個人不安特性(STAI 尺度)、理想自己(一般的自己イメージ尺度)に関するアンケートを行い、条件間で変化した動作との関連を見た。

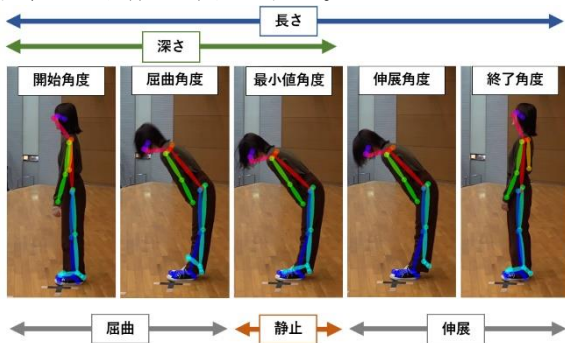


図1. お辞儀動作の分析指標

3. 結果

3.1. 自己呈示の意図の強さ

練習と本番の条件間で、自己呈示の意図に違いがあるかどうかを確かめるために、自動的な印象操作尺度 7 項目を使用し、対応のある t 検定を行った。7 項目のうち 5 項目に有意な差が認められたことから、自己呈示の意図が状況に応じて変化し、その意図の程度に従って、行動方略(お辞儀の仕方)にも反映されるということがわかる。

3.2. 量的データに基づくお辞儀特徴の比較

お辞儀動作特徴量を従属変数として、スピーチ前後(開

始/終了)×条件(練習/本番)の 2 要因分散分析を行った。その結果、条件の長さ・深さ・静止時間に主効果が認められた。印象操作の意図が強く働くときより長く深いお辞儀を行い、静止もより生起することが示された。図 2 にお辞儀の深さを従属変数とした場合の各水準の平均値を示す。

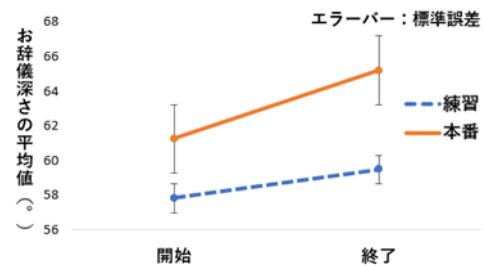


図2. お辞儀深さの平均値

3.3. お辞儀の動作と個人属性

自己呈示の意図の強さによって変化した動作と個人の欲求や特性の関連を見るために相関分析を行った。状況不安と開始時のお辞儀の長さに弱い負の相関が見られた($r = -.310$)。また、精神的強さ(自己イメージ)と終了時のお辞儀の深さに弱い正の相関が見られた($r = .312$)。これらより、状況不安や自己呈示イメージによって、自己呈示方略がお辞儀動作に反映されることが示された。

4. 考察

自己呈示の意図には強弱があること、そしてその強弱の程度が行動にも反映されることから、日常的な動作である「お辞儀」の一部には「装い」としての自己呈示機能があると示唆される。その表れ方は必ずしも一様ではなく、個々人の不安特性やジェンダー、自己呈示欲求の強さといった個人属性によって、「他者の前で自分をどう見せたいか(あるいは見られたくないか)」という欲求が、お辞儀という何気ない動作に表出されていることが明らかになった。また、本番でのお辞儀は、佐藤(2019)の自動的な印象操作として習慣化された動作であることも考えられる。

参考文献

- [1] Cao, Z., et al. (2018) "OpenPose: realtime multi-person 2D pose estimation using Part Affinity Fields." arXiv preprint arXiv:1812.08008.
- [2] 白井芳奈, 阪田真己子, 鈴木紀子, 山本倫也. (2014). 返答挨拶に影響を及ぼすお辞儀と発話のタイミング構造. 日本認知科学会大会発表論文集. 756-761.
- [3] 佐藤広英. (2019). 対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果. 信州大学人文科学論集 (6) . 49-58.